

[008_1981]第八回中央図書館貴重文物展観目録 : 16 世紀～18世紀ヨーロッパ製古地図

九州大学附属図書館中央図書館

小野, 菊雄
九州大学教養部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1485005>

出版情報 : 大学広報. 428, pp.1-8, 1981-12-22. The Committee of Public Relations Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

大学広報

No. 428

昭和56年12月22日発行

(編集)
九州大学広報委員会

第八回中央図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

16世紀～18世紀ヨーロッパ製古地図

はじめに

今回の展観は、プトレマイオス世界図、オセアニアに関する地図、オランダの諸地方図その他多様であるが、このうちオランダ諸地方図などは興味深いものであり、また、貴重な古地図ではないかと思われる。

教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

なお、前々回及び前回にひきつづき展示地図の選定、解説、配列等について教養部小野菊雄教授に多大の御尽力と御指導を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

記

展観場所：中央図書館メインロビー

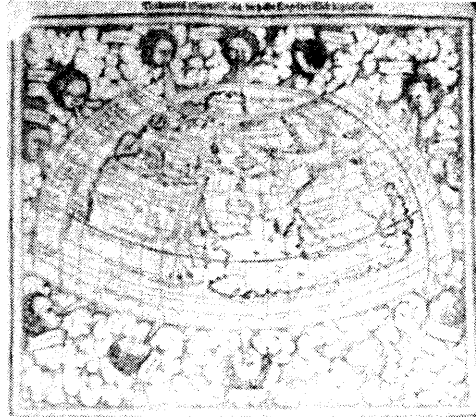
展観期間：昭和56年12月14日(月)から

昭和57年1月9日(土)まで

展 観 資 料 と そ の 解 説

プトレマイオス世界図 S. Münster 1550年頃 バーゼル(?)

この図には裏にタイプで「アジアー1550年頃、Muensterによる地図、木版、フォリオ」とある。S. Münster(1489-1552)は、1544年世界諸国の地誌を主とし、木版の挿し絵や地図を付した「Cosmographia」を著わした地理学史上に著名な人物である。しかし、この世界図は彼の知識を表わしたものではなく、表題にある



ようにローマ時代の有名な天文・地理学者^{プトレマイオス} Ptolemaeusによる世界図である。^{プトレマイオス} Ptolemaeusは2世紀中頃、当時知られていた世界の約8千の地点の経緯度表を主体にした「地理学」という書を著わし、それにもとづく地図も作成した。この業績は中世ヨーロッパでは忘れられていたが、15世紀初めのラテン語訳で復活し、その後は15世紀中頃の印刷術の発明とあいまってヨーロッパに普及したのである。

西はアフリカ北西のカナリア諸島から東は180度(中国の西安付近)まで、北は「スカンヂア」島や「トゥーレ」から南はナイル川水源付近までを含む彼の世界図は、投影法(円錐図法)を用いた最初の地図でもあり、そこには正しく内陸湖としたカスピ海、アジアの大半島(今日のマレー半島)、アジアを東西に走る山脈(今日のヒマラヤ山脈)、ナイル川の水源地帯等々興味深い様々の特色を有している。そのうちの最大の特色は、大きな^{タプロ}Taprobana島(セイロン島)のあるインド洋が、アジアとアフリカが南で接続した陸地によって閉じられた形の湖になっている点である。もちろん、^{ミュンスター}Münsterの時代には、これは誤りであることはすでに知られており、従ってインド洋の南には「^{プトレマイオス}Ptolemaeusによる未知の土地」と記されている。もっとも、このような誤りはあるものの、^{プトレマイオス}Ptolemaeusの世界図および地方図は、大航海時代の到来までは最も重要な地図であった。

なお、この図には北ヨーロッパに「MARE GLACIALE」(氷の海)と「Septentrional Regiones」(北の地方)として西へ突出したスカンヂナビア半島などが描かれているが、こ

これらの知識は^{プトレマイオス}Ptolemaeusにはなかったものであり、このような一部分の改訂版の刊行は1482年にはじまったといわれる。そのほか、世界の周辺に描かれた人物は風の神であり、それぞれがまた方位も示している。また、この図の裏には、風の名称と向きを示す模式図が記されている。

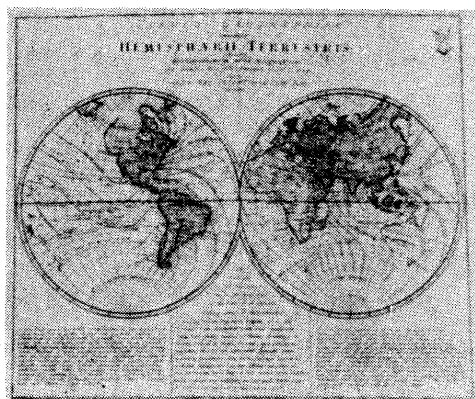
両半球図 J. C. Schreiber 1720-30年 ライプチヒ

J. Schreiber^{シュライバー}(1676-1750)はライプチヒの地図製作者である。両半球のうちの東半球図には粗雑な形の日本がみられ、その北には「I E D S O」半島、さらにその東に接して大きな陸地がある。この陸地は左の西半球図につながる「Am. Sep.」(北アメリカ)であるが、その南岸には「TERRA ESONIS」(エゾの土地)と記され、カリフォルニア半島に接続している。アジア北東端の東と北への二つの半島は、1725-30年の^{ベーリング}Beringの探検の結果、地図上に登場してくる形にも似てはいるが、北への半島などは1725年の^{ホーマン}Homannのカムチャツカ図のそれの方により類似しており、この図の裏にメモされている「1720-30」の作成年代で妥当と思われる。なお、下方に小さく描かれている虹、竜巻その他の自然現象も、前回展覧の^{ホーマン}Homannの両半球図とその描写は全く同じである。また、中央には上に^{コペルニクス}Copernicus、下に^{チ ョ プラーヘ}Tycho Braheによる太陽系惑星の運動理論の模式図が示されている。

両半球図(左) Bor 1744年 ニュールンベルク(?)

両半球図(右) Borus 1744年 ニュールンベルク(?)

この二つの図は、その内容や表題にある作者の肩書きが同じであることからみて、同じ人物による作品と考えられるが、R. V. ^{トゥーリー}Tooleyの「地図製作者事典」(1979)によると、1764年にニュールンベルクの^{ホーマン}Homann出版所刊行のドイツ郵便馬車連絡地図を作成した^{ボルス}J. J. von Borsという人物があり、二つのうち左図の右下隅に小さく「磁針の傾き」というドイツ語が記されていることからして、^{ボル}Bor^{ボルス}(Borus)をこのBorsとみてよいかもしれない。とすると、



Bor 両半球図

この両図はニュールンベルク刊行と推測される。なお、左図では「1744」と明記してあるが、右図は枠外の右上に「1744」という年号が記されている。

両図ともに北アメリカ北西岸が北へ延びていることやオビ川河口などのシベリア北岸およびその北東端の海岸線あるいはオーストラリアからニューギニア付近の海岸線等々の類似など全体的にみて内容はほぼ同じであるが、たゞ、日本の北方に関しては右図には千島が全く記されていないなど若干の相違がある。

そのほか、左図では偏角すなわち磁石の針が指す北と地理的北極とがなす角度、いわばずれの角度が等しい地点を結んだ等偏角線の分布が記されており、偏角0度の線をはさんで、東へずれる方を赤、西へずれる方を黄で色分けし、5度間隔の曲線であらわしている。一方右図には、赤道付近の風（貿易風）の風向が矢印で示されているが、そのほかに図の上方に北極中心、下方に南極中心の半球図、右下にいわゆる陸半球図、左下に水半球図が描かれている。こうした四つの半球図を両半球図の周囲に示しているものとしては、1740年のフランスのJ. N. Delisleの地図などがある。

第五の大陸あるいはポリネシア群島あるいはオーストラリアあるいは南インドの地図

F. G. Canzler 1795年 ニュールンベルク

F. Canzler (1764-1811) は^{カンツラー}ゲッチングンの教授で、^{ホーマン}Homannの地図出版社のために活動した人である。この図はアジアを緑、ポリネシアを西部、中部、東部とし、各々黄、濃緑、赤で色別しているが、今日のオーストラリアは中部、ニュージーランドは東部に入れている。

この図では、1768-75年のJ. ^{クック}Cookの探検の成果がオーストラリア東岸の海岸線、オーストラリアとニューギニアの分離、南・北両島から成るニュージーランドその他に示されているが、VAN ^{ファン}DIEMEN'S ^{ディーメンズ}LAND ^{ランド}（タスマニア）が島とわかるのは1798年、オーストラリア北部アーネムランド北西のメルビル島などの存在が判明するのは19世紀初めであるので、この図ではこれらの島々はまだ大陸に含まれている。

ところで、この図では今日のオーストラリアには「ULIMAROA ^{ウリマロア} oder NEU=^{または}HOLL-^新AND」^{オランダ}とある。このうち、「新オランダ」は当時の一般的呼称であるが、「ウリマロア」はニュージーランドのマオリ族による呼称であり、この名称は1780年のスウェーデン製地図に登場し、1818年頃までドイツやスウェーデンの地図にみられたという。また、今日のようにオーストラリアの名称が使われるようになるのは19世紀初めであり、この図でもオーストラリアのところにはまだみられないことから、この図の表題にある「オーストラリア」

は今日のオーストラリアを指すものではなく、「南方大陸」の意味に解すべきであろう。

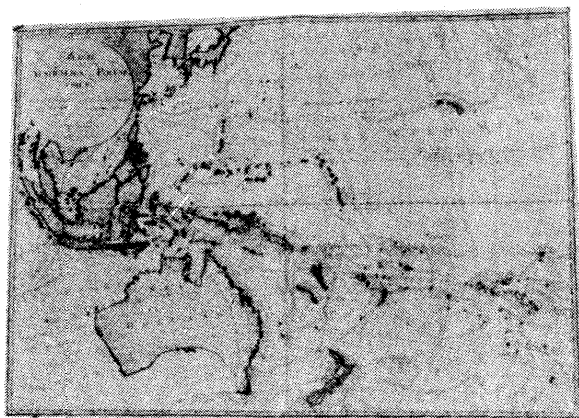
なお、この図の日本はKaempter・Scheuchzer型であり、その北に北海道とサハリンが一体になった「MATSUMAT」島、それにKonasir(クナシリ)、Urup(ウルップ)などの島が描かれている。そのほか、Sandwich諸島は今日のハワイ諸島であるが、その西方、日本の南西付近には金島、銀島が示され、さらにもう一つ「Lots Weib 島おそらくR. de Oro」という島がある。この「Lots Weib」島は、1788年スペインのM. Mearesが航海の途中北緯29度51分、東経157度7分で見たといい高さ「370フィート」の岩の島「Lot's Wife 島」である。

なお、右上の略字説明のうちの下のは、岩礁、浅瀬、小島嶼をあらわす記号であり、それは、例えばオーストラリア北東岸付近のディアナ浅瀬などに使われている。

オーストラリア(南方大陸)あるいはポリネシアの地図 作者不詳

(F. G. Canzler ?) 1792年 ニュールンベルク

この図も今日のおセアニア地方を示すものであるが、表題に「1789年までの主な航海者たちの地図、航海記および日記による」とあり、J. Cookをはじめ、イギリスのT. Furneaux、J. Byron、S. Wallis、Ph. Carteret、フランスのL. A. de Bougainville、オランダのA. Tasmanなど17世紀中頃から18世紀末にかけて南太平洋を探検航海した航海者たちの航路が色分けして記入されている。

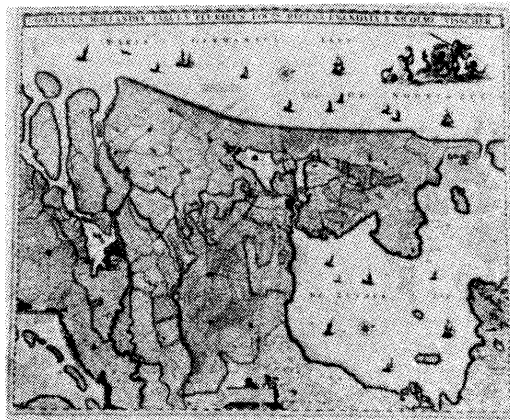


この図は内容的にはF. Canzlerの「第五の大陸」図と同じであり、アジアを赤、その他を黄で色別している点やニュージーランドの山脈の描き方などの共通性からみて、これもCanzlerの作品としてよいかもしれない。

なお、この図でも今日のオーストラリアには「新オランダ」とあり、また、「Lot's Wibe Rica de Oro」と記している。そのほか、「第五の大陸」図も同じであるが、地図上方にはグリニッジを基点にして西へ、下方では東へ数えた場合の経度が記されている。

オランダ地方図 5葉 N. Visscher 1660年 アムステルダム

オランダの地図製作者N. Visscher(1618-79頃)によるオランダ諸地方の地図であるが、下記の(1)の裏に鉛筆で「1660」という年号が記されている。いずれも表題の周辺の人物などを鮮やかに描き、行政区域別に色分けしたり、都市を赤で示すなど色彩が豊かであり、都市、建物、樹木、山々など細かい描写がなされている。なお、各図には方位盤が描か



オランダ図

れているが、地図の右側がおよそ北々東もしくは北にあたる。以下、それぞれについて簡単にみていくが、括弧内の数値は、各図の大体の縮尺である。

(1)オランダ図(1:30万) 左上にハーグ、ロッテルダム、ライデン、中央上部にアムステルダム、その上にハーレムなどの都市がみえる。「ゲルマニア海」すなわち北海に面する海岸には砂丘が描かれており、この北海やゾイデル海には、前回展観したVisscherのアジア図の砂漠と同じ方法で、多数の点でもって浅瀬を表わしている。ところで、オランダの干拓事業は16世紀に本格化し、とくに17世紀前半からは風車の大型化などともなって大規模におこなわれるようになったが、アムステルダムの北(右側)にある「BEEMSTER」「PURMER」など緑で描かれ、整然たる土地割りがみられる地域は、17世紀前半に干拓された「MER」(湖)である。その他にもポルダー(干拓地)を見出すことができるが、アムステルダムの左上にみえるハーレム湖の干拓は、この地図から2世紀後の19世紀中頃になる。なお、左下隅の別図は、ゾイデル海入口のテクセル島などの島々である。

(2)デルフラント、ジールントおよび周辺島嶼図(1:10万8千) 右上にハーグ、中央や下にロッテルダムがあるが、ハーグからその左下のデルフトにかけては、緑で示されたポルダーが多数みられる。なお、左上のGoeree島は今日では東(下側)のオーバーフラケー島と連続している。この図の浅瀬の部分では、点の集まりの粗密によって、その水深の深浅を表現している。また、上部の北海には海戦が描かれているが、これは1652-54年のオランダ-イギリス戦争の際の両国艦隊の戦いを描いたものであろう。

(3)ゾイトホラント図(1:11万3千) 右上端にゴータ、中央上にドルトレヒト、中央左

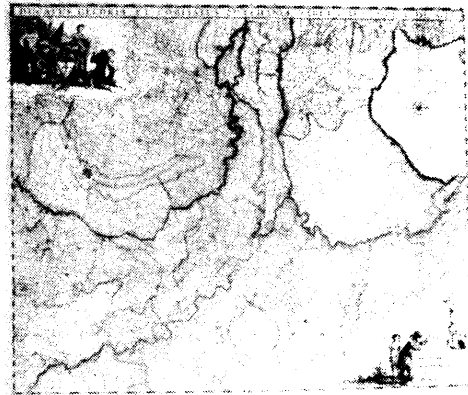
にブレダなどがある。中央にみられる水域は、今日では方位盤が描いてある付近までヴェール川の沖積作用が及んでおり、この図では湾岸にあるGeertruydenbergも現在ではすこし内陸に入っている。

(4)レノラント、アムステラントおよび周辺地方図(1:12万5千) 左上端にハーグ、その右下にライデン、右上にハーレム、やゝ右下に半円形の大都市アムステルダムがある。(1)と同様に海岸砂丘が起伏をもって描かれているが、その中に白く「velt」(耕地、土地)が点々と記され、そのうちの右上の「velt」には、村落らしきものが描かれている。また、砂丘の中を北海沿岸に達する道路がいくつかあり、両側に樹木(垣根?)が並んでいるのもみられる。

(5)ズートファニア図(1:20万) 左上にニムメヘン、その右にアルンヘム、中央にズートヘンなどの都市があるが、この図では山々、森林、村落、教会、風車その他細かい記載がおこなわれている。主に右側に多い湖状の地域は泥炭沼沢地であるが、そこに道路が走っているものもみられる。図の左端中央から北西へ、エメリクやアルンヘムの傍を流れているのがライン川である。

オランダ地方図 2葉 F. de Wit 1660年(?) アムステルダム

この二つの地図は、F. de Wit(1616-98)の作品であるが、Visscher図と同じく見事な地図である。作成年代の記載はないが、Visscher図とはほぼ同じ頃であろうか。以下、この2葉についてみるが、番号はVisscher図からの連続番号としておく。



ゲルドリア、ズートファニア図

(6)ゲルドリア、ズートファニア図(1:31万5千) 中央やゝ左に長方形のユトレヒト、中央にアルンヘムなどの都市、右上にゾイデル海がみられるが、左下から右上すなわち北西へ、さらに西流するのがライン川である。左下隅、その流域にデュッセルドルフがある。右下に多数の点で示されているのは泥炭沼沢地である。この図には右下に一人の人物が手に持つ形で記号の凡例を記しているが、これらの記号は、都市、要塞、方形堡、村落、邸宅、修道院、農

民定住地(?)、水車、風車、廃墟になった邸宅などをあらわしている。

(7)ユトレヒト地方図(1:12万) この図の範囲は、(6)の右上部の一部分の地域にあたるが、中央に台形のユトレヒト、下に円形のアメルスフォルト、右端に半円形のアムステルダムがみられ、左下から北西へライン川が流れる。ユトレヒト市街、道路沿いの建物、樹木その他のものが細かく記され、また、左下のアメルスフォルダー山脈の鳥瞰図的描写、そこを走る道路と樹木(?)などは興味深いものがある。また、左下の泥炭地には道路、家屋、短冊型の土地割りがかかなりみられる。なお、この図では、右側は大体北々西の方向になる。

付記 前々回および前回の展覧解説で、生没年の記載がなかった作者について、その年号を記しておく。

Dezauche → J. A. Dezauche (1831 没)

Güssefeld → F. L. Güssefeld (Guessefeld) (1744-1807)

Lamarche → C. F. Delamarche (Lamarche) (1740-1817)